

Douglas Bush:
*Prefaces to Renaissance
 Literature*

富原芳彰

本書の著者 Douglas Bush は、Harvard 大学の英文学教授、正確に言うと、Gurney Professor of English である。ルネッサンス文学の研究者として令名が高く、その名はすでにわが国にもよく聞えている。カナダの Ontario 州 Morrisburg に生まれ(1896年)、Toronto 大学で古典を修めて B. A. と M. A. を取り、さらに Harvard で英文学を専攻して、Ph.D. を得た。1940 年からはアメリカに国籍を持っている。著書も多い。「英詩における神話とルネッサンス的伝統」(*Mythology and the Renaissance Tradition in English Poetry*, 1932, 1963), 「英詩における神話とローマン的伝統」(*Mythology and the Romantic Tradition in English Poetry*, 1937), 「ルネッサンスと英国のヒューマニズム」(*The Renaissance and English Humanism*, 1939), 「現代の失楽園」(*Paradise Lost in Our Time*, 1945), オックスフォード英文学史

の一卷をなす「17 世紀前期(1600—1660)の英文学」(*English Literature in the Earlier Seventeenth Century 1600—1660*, 1945), 「科学と英詩・歴史的素描」(*Science and English Poetry: A Historical Sketch*, 1950), 「ルネッサンス文学における古典の影響」(*Classical Influence in Renaissance Literature*, 1952), 「英詩・チ ョーサーより現代に至るその主流」(*English Poetry: The Main Currents from Chaucer to the Present*, 1952) などは、そのうちの主なるものである。

ここに取り上げた *Prefaces to Renaissance Literature* (「ルネッサンス文学序説」) は、本年出版された本ではあるが、本書を構成する諸論文は、「緒言」(Foreword) を除き、いずれもすでに一度活字にされているものである。さらに遡って言えば、本書の主体を構成するものは、1952 年から 1962 年にわたる約 10 年間に Oberlin College, the Claremont Graduate School および the University of Rochester で Bush が行なった講演である。

本書は、緒言につづいて、つぎの 5 章をその内容としている。I. Humanism and the Critical Spirit (ヒューマニズムと批判的精神), II. The Classics and Imaginative Literature (古典と想像的文学), III. English Poetry: God and Nature (英詩・神と自然), IV. English Poetry: Time and Man (英詩・時間と人間), V. The Isolation of the Renaissance Hero (ルネッサンス的英雄の孤立)。巻末に、関係する 62 冊の英米書を列挙した文献目録がついている。

本書の緒言は、きわめて短い文章ではあるが、Bush のルネッサンス観を要約しているものとして興味がある。ルネッサンスは、人間による人間自身の発見、彼の内面的および外面的世界の発見とか、中世の権威主義的統

一や無名性に対する個人主義の主張とか、人間の精神と人間の生活の世俗化とか、言われて来た。Michelet や Burckhardt の名と結びつくこういうルネッサンス観を、Bush はあまりにも単純化しすぎ、偏った見方として却ける。Bush は上記のごとき 19 世紀的通説を三つの点において不満としている。その第一は、ルネッサンスのこういう「古典的」定義は、主として、イタリアのルネッサンスにもとづいてなされている点で、それ自身においても修正を要するが、とくに北欧やイギリスにおけるルネッサンスにそれらを適用した場合には非常な誤解に導くものである、と Bush は言う。第二は、ルネッサンスにこういう定義を下した歴史家たちは、19 世紀の自由主義の風潮の中にあって、とかくルネッサンスを世俗化へ向かっての偉大な解放と見ようとする偏向を持っていた点である。第三は、この偏向と結びついているものであるが、上記のごときルネッサンス観は、中世についてのきわめて不十分、不適当な知識と理解にもとづいている点である。Bush は、ルネッサンスを千年にわたる眠りからの勝利の目覚めなどという風には考えない。

19 世紀の学者たちによって片寄せられたルネッサンス観の振子は、今世紀の Niebuhr などによって、反対の極へ振られることになった。ルネッサンスは長い暗い夜の後のかがやかしい夜明けではなく、それは世界を今日の不幸な状態に導いた人間の傲慢のいちじるしい樗頭であると見るのがその見方である。Bush は決してこの極端な見方にくみするわけではないが、彼の見解の中にそれを含めることは拒否しない。

要するに、ルネッサンスと呼ばれている歴史的現象は、ある一定の方式をあてはめてこれを割り切れるほどに単純なものではない。ルネッサンス文学を偉大たらしめている天才たちの誕生は、Bush の言うように、「神の

業」に属することかも知れない。印刷術の発明から資本の蓄積にいたるさまざまの事実も、この際考慮されるべき事柄である。「しかし、われわれの問題の中心にあるいくつかの事柄は、探究が、あるいは観察が、可能である。以下の諸論のすべてにおいて、われわれは多かれ少かれ、西洋文化の二つの偉大な伝統、古典的文化の伝統とキリスト教的文化の伝統との相互作用 (interaction) に関心がある」(p. xii)。ここに、ルネッサンスに対する Bush の基本的な見方が述べられているが、それは今日格別新しい見方というほどのものではない。とくに、最近、イギリスのルネッサンス文学を見る大概の人々は、たとえば最近の多くのシェイクスピア論にうかがわれるように、Bush が上に述べたのと同じような眼でそれを見ている。特定の言え、最近のシェイクスピア研究は、彼の中にいかに多く中世が生き残っているかを明らかにすることに熱中して来た傾きすらある。

Bush は、ルネッサンスというものを長い目で見ている。彼によれば、15、16 世紀における古典の復活は、歴史的パターンの論理的かつ不可避的な繰返しの一つの偉大な例ということになる。古代、ギリシア文明がその盛りをすぎたころ、ギリシアは剛健だが文化の遅れたローマ人によって征服された。ローマ人は、かれらなりの仕方でギリシアの文化を吸収し、拡大するローマの版図の下で、ギリシア・ローマ文化はヨーロッパの大部分にひろがり、やがて若干の闘争を伴いつつ、キリスト教の浸透を受けた。ついで、衰退期のローマ帝国は剛健にして文化の遅れた蛮族によって蹂躪されることになり、ここにふたたび征服者は被征服者によって、こんどは多少ともキリスト教的世界の中で、教育されなければならなかった。「この再教育の長い過程がルネッサンスであった」(p. 3)。われわれがふつうルネッサンスと呼んでいる 15、6 世

紀のそれは、Bush によれば、一千年にわたる過程の「かがやかしいクライマックス」にすぎない。いや、ルネッサンスの二つの重要な衝動であると Bush が考えるところの「懐疑的合理主義」(sceptical rationalism) と「実験的科学」(experimental science) とは、主としてその後発達したものであり、20 世紀になって人間の思想と生活とを一般的に支配するようになったものであるから、その意味では、それは「クライマックス」とも呼べないのである。

Bush のこういうルネッサンス観は、今日それほど独特のものではない。しかし、文学を眺める場合には、こういう長い展望を心の中に保つことがとくに必要であることを Bush は力説している。いわゆるルネッサンスは突然の現象ではなく、また今日終熄しているものでもない。いわゆるルネッサンス期を通じて中世の書物や態度や観念が執拗に生きつづけたことも驚くには当らないことだし、現にわれわれの時代、われわれ自身の中にも、ルネッサンス期にあったのと同じような奇妙な混交は存在するのだ、と Bush は言う。「もし古典の復活が単なる仇花でなく、豊かな実りを生んだとすれば、その一つの主要な理由は、中世的、キリスト教的伝統と信仰の力であった」(p. 4)。

Bush のような見解を取る時、ルネッサンスは長い過程であるが、15, 6 世紀にそれが急速な進展を見せたことは、Bush も十分にこれを認めるところである。15, 6 世紀に澎湃として起った古典の研究、すなわちヒューマニズムは、中世的付着物から離れて、現実的かつ有用な真理の追求という意味を持っており、そこに批判的探究の精神を顕著に醸成した。科学の成長に好ましい雰囲気を生み出した。当時のヒューマニストたちは、Rabelais などを除いては、一般に自然科学そのもののへの興味はあまり示さなかったが、「その

一つの理由は、かれらは人間による自然の支配ということよりは、人間による人間自身の支配といういっそう困難な問題にもっと大きな関心があったからである」(p. 8)。さらに、ヒューマニストたちが古代人とキリスト教的伝統とから学んだ倫理的理想主義は、Vesalius (『人体図譜』) や Machiavelli などによって暗示された「行動主義的人間観」とは相容れないものがあった。そして Bacon は、実用心理学者として、Machiavelli やその他、「人間のなすべきことではなく、人間がなすことを書いた」人たちに感謝した。しかし、たとえば、Erasmus は、人間は何をなすべきかのキリスト教的・古典的理想を絶えず説きながら、人間がなしたことの愚と邪惡とに対してヨーロッパの良心を目覚まし、Erasmus の宗教的、倫理的、教育的努力に全幅的に協力した Vives は、同時に、現実主義的な心理学および社会学の先駆であった。ルネッサンスというのは、一つの錯雑した事態である。

ルネッサンス期の想像的文学について基本的なことは、ラテン文学に対する尊敬とそのスタイルの模倣ということである。ラテン文学に対する尊敬とそのスタイルの模倣は、時に過度に及び、Erasmus によって諷刺され、Bacon は事柄より言葉を先にする当時の一般的风潮を攻撃している(しかし、Bacon の攻撃には偏見が含まれている)。イギリスの最初の重要な古典主義者 Sir Philip Sidney すら彼の生来の本能と文学の形式についての彼の信条との間の闘争を告白している。文学の形式に関する教条がしきりに作り出された。アリストテレス、ホラチウス、その他が教祖と仰がれた。かれらの説いたところが教条に硬化したのが、この時代の特徴である。アリストテレスの『詩学』から三統一の金科玉条が引き出されたのは、そのもっともよく知られた例である。当時イギリスでしきりに書か

れた修辞学の本は、結局、ラテン文の格調をもって英語を書くすべを教えようとするものであった。しかし、単なる模倣からすぐれたものが生まれる道理がない。「ルネッサンス期のもっとも偉大な作家たちは、それぞれに天才を恵まれた上に、人まね猿にならず、独自の新鮮な人生観あるいは伝統の土着的、大衆的要素との接触を失わずに、古典から利益を得ることのできた人々である」(p. 26)ということになる。Shakespeareをはじめ、Ariosto, Tasso, Camoens, Spenser, Rabelais, Cervantes などが、いかに古典と中世(キリスト教、ロマンス、騎士道)の両方をふまえてそれぞれの独創を展開しているかを見よ、とBushは言う。

本書の第3章と第4章とは一括して取り扱われるべきものである。Bushはここで、神、自然、時間、人間という広大な題目をかかげ、それらについてのルネッサンス的観念の特徴を考察し、その例証をイギリスの詩の中に求めている。上の四つの題目は相互に密接に関連し、実は切り離せないものであることは言うまでもない。

Thomas Aquinas によるいわゆる「中世的総合」において、われわれの住む世界は理性的な神による理性的な創造物であり、人間は神から与えられた理性によって、これをある点まで理解できるとする思想が成立した(ある点から先は、救済されるために不可欠の超合理的真理が啓示によって与えられなければならない)。この思想は、Bushによれば、成立するかしないうちにすでに崩壊をはじめた。その後のスコラ思想においては、理性的存在としての神というトマス的観念は、意志としての神の観念に道をゆずったからである。理性と信仰の分裂が来たのである。この分裂から二つの相反する思想が発達した。その一つは、古代の懐疑主義の復活に助けられて起った反キリスト教的合理主義であり、

もう一つは、LutherやCalvinの神学であった。思想上の複雑な問題がここに展開し、当時の文学の中にもそれが重大な意味をもって反映していることは言うまでもない。そして、当時の英文学を見るかぎりにおいては、つぎのBushの言を首肯せざるを得ない。

「宇宙は神の合理的な秩序であるという観念は、それが宣揚されるにせよ、当然のこととされるにせよ、あるいは、時としてその当否が問われ、あるいはそれが無視されるにせよ、とにかく、エリザベス朝およびジェームズ1世朝のまじめな文学の背景および基底をなしている」(p. 49)。宇宙は神の理性によって統べられている合理的秩序であり、万物は「存在の偉大な連鎖」をなしているという観念は、Shakespeareを考える上においても重要な働きをするものである。このような宇宙観(自然観)の中で、人間は天使と獣の間にその位置を占める。人間は一方において獣的なものに引っぱられ、他方において天使的なものに引っぱられているという感覚、人間の不可避的な二重性の感覚は、個人の道德的葛藤、そこにおける勝利と敗北を、宇宙の神的な秩序と関連せしめることになり、単に人間の世界、現世の世界における意味以上の意味(いわば宇宙の意味)を悲劇に付与する結果ともなった(p. 89)。当時の自然科学が唱えはじめた新しい自然観は当時の文学に対しては(Donneのごとき場合を除いて)ほとんど影響を与えていない、とBushは言う。

ルネッサンス期の英文学にあらわれている時間の観念も、今日のわれわれの常識的な観念とは異なっていた。当時の一般の人々にとって、時間は「科学的というよりはむしろ宗教的観念であった」(p. 66)。世界の歴史は、天地創造、キリストの誕生(いずれも測りうる過去の出来事)、および測り得ないほど遠い未来のことではない世界の終りと最後の審判の三大事件の上に乗っているものと考えら

れていた。また、とくに17世紀初頭において顕著に見られる思想では、地上における人間の歴史は、天地創造からモーゼまでの2,000年、モーゼからキリストまでの、すなわちモーゼの律法の行われた2,000年、キリスト教天啓法時代の2,000年、これらの等しい長さの3期に分かたれるものとされた。この思想は、17世紀初頭の人々に、世は末世であり、自然は凋落しつつあるという考えを抱かせた。この思想は Spenser にもうかがわれるが、とくに Donne や Sir Thomas Browne などにおいて顕著なものである。*Carpe diem* という言葉にはさまざまなひびきがこもる。とにかく、時についての瞑想（万物の無常、死、愛の不滅）は、当時の英文学に独特の性格を与えている要素の一つである。

ルネッサンス文学の英雄は、ローマン主義の時代や現代の英雄とちがいで、社会からの離反によって孤立するのではなく、社会によって一般に受け入れられている理想の拡大された投影として聳え立っているというのが、本書の最後の章の要旨である。人間は機械化された、無意味な宇宙に孤独でいるのではない。彼は神の秩序の中にあって不朽の運命を背負った存在として、天使と獣の中間にいる。人間を代表する英雄たちは、宿命や社会に対して無抵抗で無力な犠牲者ではない。かれらはみずからの行為を選択し、それに責任を持つ。たとえ、かれらの行為とその結果が、われわれを人生の解き得ぬ謎に直面させるにしてもである。ルネッサンス文学において、その英雄たちは万人の代表選手として立っている。

本書は、比較的狭いスペースの中に重要な事柄がぎっしり詰まっている感じで、その全体の要領を短文につづることは困難である。Bush が触れている問題の一つ一つがルネッサンス文学研究の重要なテーマをなすはずのものである。この「序説」の中から人はいく

らでも問題を引き出せるであろう。すぐれた序説と言わざるを得ない。

Douglas Bush: *Prefaces to Renaissance Literature*, Harvard University Press, 1965.